

OCUAC

大阪市立大学山岳会会報

NO. 44 2007. 8. 15

下田勝久氏（平成2年理院卒）

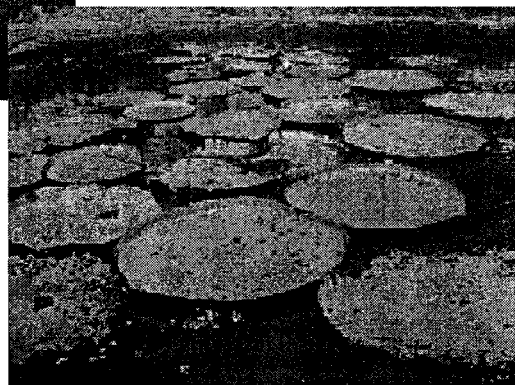
アマゾンを訪問

下田氏は、2005年8月22日から27日までアマゾンに行き、貴重な体験をされました。残念ながら全文を掲載は困難なのでWeb上にアップしました。暫定のURLは <http://www.geocities.jp/nobrin1956/amazon.pdf> です。



ワニを手づかみする下田氏

花の咲いている オオオニバス



なお、下田氏は、国際農林水産業研究センターに勤務。国際的なプロジェクトに関わっておられます。

07. 5.25

平成 19 年 5 月山雑記

1967 年卒 山田裕敏

通しで 9 日間も山に入っていると、こういう遊び気分の山行でも色々な局面に出会うもので、今回の 5 月山は久しぶりに何やかや織り交ぜた体験を味わうことが出来た。大勢で行くとそれだけ人との出会いが沢山あって、これまで同行回数が少なかった人とだけではなく 40 年来の付き合いのある人からも、ポロリポロリと新しい面を見せて貰えたし、日常性を離れてちょっと厳しい状況が生まれると、自分にも当然それへの反応が生じてくる。歳はとっても心がけ次第で結構面白い事が味わえるものなのだが、次の拙文ががそれらを旨く伝えられるだろうか。

4 月 28 日 前夜大阪発で、深夜に中崎山荘から少し上がった地点に先発組が張ったテント泊。6 時ごろ武部君合流。雨模様だったので 10 時ごろ出発。槍平へ向かう。

白出し沢出合いを過ぎた頃から再び天候悪化し、閃光と雷鳴間が 3 秒位と

気持ちの悪い思いをする。雨だったが高度を上げてゆくと雪となり、まるで春山の入山のよう。15 時ごろ避難小屋着。伴、佐々木、上田、武部、藤井、山田の 6 人 Party。

4 月 29 日 この山行は、当初は笠東面での定着合宿のつもりであったが、天候も良さそうなので、前半に南岳西稜から槍までを入れてみた。南岳西稜は吾が世代卒業後 2~3 年ばかり若い連中が冬山で使った場所で、概略は聞いており個人的には永年温めていたルートである。然るにいざ登る段になって、碌に勉強してきて居ないことがたたり、直ぐに馬脚を現した。

まず、取り付地点。槍平小屋から少し下ったところに東側から沢が合流する。目指す西稜はこの沢の左側である、との思い込みと、いやこれは中岳に至る尾根であって、南岳西稜はこの沢の右側である、との説のぶつかり合い。

後者を取り入れることになるのだが、些か自信がなく、取り敢えず沢身を詰めて行く。

1 時間ほど登ると、見晴らしが開け、左は急峻な尾根が形成され、右の尾根からは中央部のはなだらかなカール状の谷を目掛けて緩やかに雪面が下ってきている。最奥部はおそらく国境稜線だと考えられるのだが、いまいち確信がない。そこでルート取りだが、ずっと沢の最低部を取って行くのは大回りになるので、右の斜面を斜め上がりに詰めてゆく。途中で雪が締まり、アイゼンが快適に効いてくる。

インターネットで取得した雪の西稜は、結構尾根幅が狭く、3 級程度の雪



稜をアンザイレンしている写真が見られるが、このままでは側面を左に流れ安易な雪面登高で終わってしまう。そこで斜面を直登し尾根に出ようと試みる。丁度樺の木が1本出てきたので、これの右側を行こうとしたのだが、傾斜がきつく、アイゼンの爪がオーバーブボンの太ももの部分に触り破いてしまう。これでチョットもたつく内に流れが左に移ってしまい、結局核心部を避けた形で、最後まで雪面を辿ることとなった。

6時出発で11時ごろ稜線着。快晴なるも強風。昼食の後、槍方面に向かう。少し進むと、この主稜線の雪の状態が尋常では無いことに気付く。下部ではアイゼンが快適に効いて、と記したが、ここでは、雪面が何度も融けたり凍ったりを繰り返したため、氷化しテカテカの状態。それも部分的ではなく、歩行場所である尾根の西側は全面的に凍っており、これまでに何度も雪の山に登ってきたがアイゼンの爪先の鋭利さを此れほど意識するのは初めての経験だった。ここで上田さん、アイゼン不調にて、来た道を戻ることになり伴さんは此れをエスコートされた。南岳から中岳まで、部分的には軟化した場所もあったものの、中岳の下りが難問で岩場に行くのは厄介と武部君、急峻なクローワールを下る。それに藤井君ピッタリ付いて下ってゆく。先行二人がザイルを仕舞ったままで降りてゆくものだから、こちら付いて行くしか手がなく、最初はアイゼンががん蹴飛ばし、足場を作る。ピッケルも石突部分は到底刺さらず、ピックだけがかろうじて氷をかむ程度。

スリップすれば絶対止まらない急斜面を結構長く下ってゆく。これが日本の5月山なのだろうか。今までの経験では41年も前、3年生の春山で、立山から別山乗越までの間が氷化していたことが思い出されるが、当時のアイゼンは先がまん丸だったし、行程としても部分的であった。冬の穂高や剣でも氷面で難渋したことは無かった。今の自分の技術の拙さがこんな怖い思いをさせているとは到底思えない異常現象だったと記しておこう。

難所を越えて暫く進む。槍沢方面でスキーを楽しむ軍団が見える。平坦な尾根道だが、右側に張り出した雪庇が気になる。ある部分では、歩行位置が割れ目の直ぐ左側であることに気付き、思わず更に左による。佐々木・藤井・武部の順で歩くのだが小生だけは列を離れ左いっぱい歩く。余りに離れるのでチョット右に寄ったとき、3名の足元の左が崩れるのを視認。先頭二人は何とか稜線に留まるが武部君の姿が見えない。雪面に腹這いになり、切れ落ちて出来た氷崖を覗くと3mほど下のテラスに彼が立っている。藤井君のザックからザイルを取出しているうちに、自力で上がってきた。もしあのテラス無かりせば、下まで雪面を落ちていった事だろう。一命を取り止めていても、大変な騒ぎになったことは間違い無く、テラス様々であった。槍の穂先は敬遠して15時幕営地に戻る。

4月30日 快晴。全員で新穂高に戻り、食料・飲み物補給し穴毛谷に向かう。穴毛小屋跡の平地に幕営。武部君は翌日の荒天を見越して下山。

このあと2日間雨天のため沈殿する。沈殿中に思ったことは、結果論ではあるが、「30日朝から、急いで下山することなく、なぜ南岳西稜を正規のルートでもう一度登らなかったのだろう」、ということだった。1日は雨と判っていたので先を急いでも仕方がなく、好天の30日に目の前にある西稜本チャン登高のChanceを逃してしまった。

5月2日 沈殿も2日目となり、退屈しのぎに雨中ではあるが穴毛谷の偵察をする。この冬は雪が少なかったが、四の沢出会いから穴毛大滝までの間の雪崩の跡が物凄く、まるで恐竜が何匹も暴れまわった舞台跡の様な趣。笠東面に詳しい先輩連もビックリ。

5月3日 現役2名を含む後発隊が午後入山してくるので、藤井君は下山する伴、上田と共に新穂高に向かう。佐々木・山田は三尾根に登る。四の沢を少し上がり、左側の雪面に取り付く。雪も締まり快適に高度を上げる。途中大きな樺の木の本元の岩室に山田がはまる。表面は雪に覆われ、何も判らないが、10人は入れる大きな窪みで、思わず冬眠する熊の棲家かと身構えるほど。熊谷達也氏の邂逅の森の世界だった。三尾根上部は結構尾根幅が狭く、用心のためアンザイレンし、尺取虫で進む。11時ごろ稜線直下に出るが、数mもあるハングした雪庇に行く手をさえぎられる。氷雪を切り開きStep upしたかったのだが、道具もなく、雪庇の下を左に逃げる。

アンザイレンして11ピッチ約400m進み二尾根付近で主稜線に這い上

がる。この間1～2時間、暖かい日差しの下、過去のコブ尾根や天狗尾根登高を思い出しながら雪と氷の世界を存分に楽しむ。

昼食の後笠に向かうが、天候悪化し雪となる。14時笠頂上着。テント帰着は18時。後発隊は交通渋滞で遅れており、藤井君と吉村さんが先行しテントを張り、兵頭君は下でattend。

山辻、島川、福山、小椋、松本（新人）と兵頭君は19時半ごろ到着。我々は先に夕食を済ませ仮眠する。夕食後の22時ごろ、翌日の打ち合わせを行う。

5月4日 快晴。島川・福山・兵頭・吉村は穴毛谷を詰めて本峰へ向かう。佐々木・山田は現役と共に杓子平を目指す。雨中偵察の折は陰惨度が強かった穴毛谷だったが、この日は

朝日が輝き、上部の青空と岩と雪とのコントラストに目が行って、左程の悪い印象は齎さなかった模様。途中で元気な小椋・藤井組に笠行きを薦め、3名で広大な杓子平の端まで進む。ここまで来れば、漸く槍・穂高連峰が現れる。松本君はこれから何度もこの山々と対峙していった貰うことになる。

昭和63年生まれ、18歳の今後の活躍が楽しみだ。

5月5日 現役の雪上訓練は島川部長や兵頭さんたちにお願ひして、佐々木・吉村・山田は下山。西穂に向かったDr.山辻と新穂高で合流し、駒ヶ根山荘へ。現役他も6日の雨天を避けて、夕刻山荘着。新人歓迎会とし遅くまで歓談する。

以上

<新入部員 松本和也君の感想>

立っているのは、岐阜県。目の前にあるのは、笠ヶ岳。4 月には想像できなかった所に、私は居ました。

標高約 2900 メートルの山を前方に臨んだ時のあの威圧感を忘れそうにありません。雪がかなり残っているのに加えて、山登り一年生にとっては急すぎる斜面。どうにか無事に降りられますようにと思いながらテント場まで登りはじめました。

テント場にたどり着く前に闇が訪れ、初日にして暗闇の雪面を歩くことになり、ごつごつとした岩場までよじ登ってなんとかテント場に到着。明日の出発に不安 7 割、期待 3 割ぐらいの気持ちで就寝しました。

翌日の登山。昨日の道のりがなんでもなくなるような長さで傾斜を併せ持つ雪面を延々と登っていきます。

一の沢、二の沢・・・と登りながら、たまに後を振り返ると、「すごい！自分がここを登ってきたのか！」と思うほどの道が、遥か後方まで続いています。

しかし、頂上に登ってみたいという思いに体が付いていかず、途中で隊を二分して、私は O B さん 2 人に近くの稜線に連れていってもらいました。約 2500 メートルというその稜線にある雪庇を見学し、北アルプスの山々の名前を教えて頂いてテントに向かいました。降りながら見る笠ヶ岳山頂は、400 メートルの違いしかないので見えました。私が山頂に登れる日は来るのでしょうか。

次の日は 4 の沢にて滑面停止の練習。かなりの斜面を滑ってピッケルで体を止めます。移動中や、練習の合間に何度か山の壁面を見る機会がありましたが、雷がなったようなミニ雪崩やゴロゴロと転がる岩を目の当たりにして、やはり山も生きているのだと怖ろしくなりました。

この日の午前中で無事に山を降りました。山頂にはいけませんでした。現役先輩方や O B さんから数多くの技術を学ぶことができ、有益な登山体験でした。

「山に登っている時は（もう登らんとこ）と思うが、山に降りると（さあ次どこ登るか）と思うようになる」という O B さん数人の御言葉を拝聴致しましたが、

駐車場から振り返って見た笠ヶ岳はやはり「またおいで」と言っているように思えました

<藤井陽介君の感想>

今回は長い間山に入りましたが、5/1,2 の悪天候で大した山登りが出来なく消化不良に感じてます。とはいえ、雪上訓練の際にスノーバーの使い方を兵藤さんにしっかり教わったり、南岳からの縦走では雪庇がどうやって崩れるのか直に体験できたり、蓬莱峡でのアイゼントレーニングの効果も体感したり云々・・・と、実は少しは勉強していたみたいです。

あと、松本君の参加は彼にとって大きな経験になったと思いますし、1 人増えたし(すぐに 2 人抜けるけど)一瞬は部も活性化、これからまた少しずつ皆で成長していけたらと思います。

霊峰富士のスキー山行 （富士宮口）

メンバー： 片岡泰彦（L）、伴 明、上田忠士、兵頭 渉、大島一恭、武部秀夫、
吉村治代

日時： 2007年5月19日～20日

<清めの酒>

兵頭・片岡の東京組は深夜1時に到着。富士スカイライン沿いの水が塚駐車場に大型テントを設営して、大阪組を待つ。大阪組4人深夜2時に到着。清めの酒を飲み始め、真っ暗な富士山の方角に合掌して登山の安全を祈願する途中、早くも日本酒が無くなる。3時シュラフに入る。テント設営は芝生の上で、傍に屋根付のテーブルとベンチがある格好の場所。明るくなって回りをみると、子供が橇で雪遊びをするゲレンデの一角であった。管理人に文句を言われたら移動することにし、ここを2日間のBCと決めた。



<雷鳴>（5月19日）

午前4時頃、岡山から武部さんが単身到着。明け方から風雨激しく、雷鳴・稲妻も走る。嗚呼、富士山が怒っている。こんな日は、登ったらあかんと行動を諦めかけたら鳥の囀りが聞こえてくる。風は強いが、空も明るくなったので、BCを10時出発。

富士宮口新5合目からスキーを背負って歩くが、人影がない。我々がトップを歩いている。6合目を過ぎたところで、早くも硬い雪のトラバースがあり、緊張する。担いだスキー板が強風で振られ、ザックが重い。整地されてない雪面の滑りは難しい上に、硬いと危険を伴う。早く気温が上がることを祈りながら、8合目直下3,150mまで登り、今日の最高点とした。全員集結を待つてメインイベントのスキー滑降に片岡L先導の下に移る。

<錯覚>

滑り出しの斜面は狭く、下が広がっているので急に見える。シュプールのない新雪バーンではあるが、転んだら滑り台蟻地獄に落ちると錯覚する。暫し不安と静寂の雰囲気の中、吉村さんが4回転目に、ドタッと転ぶが、ずり落ちない。雰囲気が変わった。富士は、裾野が広く見た目に雄大で、呑まれてしまう。

<お山は晴天>（5月20日）

4時10分起床。気温氷点下。富士山が頂上まで見渡せる最高の天気だ。登攀意欲が高揚する。テントを撤収し、快適なBCを出発。昨日同様新5合目から歩き出す。先行パーティが50名程有り、先頭は既に7合目付近を歩いている。背中に2本のスキー板若しくはボード板を背負っている人が多く、お供え物を頂上まで運び上げている宗教信者の行列風景のようだ。板が朝日に反射してキラキラ光彩を放ち、美しい。

雪面に先行者のステップがあるので、アイゼンを着け、高度を稼ぐ。頂上までアップのみでダウンがない富士山独特の山登りが体験できるが、8合目を超えると、高度の影響もあり、息をつく回数が増える。先行隊と後続隊に別れ、ヒマラヤを想定して無線で連絡を取りあう段取りで、各々只管高みへ高みへと登るのみ。天は群青色。

<頂上の神事>

9合目を過ぎると、風強く、雪面も硬くなる。最後の30mは、夏道が露出している。頂上は大変な強風で立っているのが困難な状態であった。浅間神社は、半分雪で埋まっていたが、担ぎ上げたお神酒を備え、二拝二拍手一拝で山の神々に、今日の安全を祈願する。我々は、山の神が怖い敬虔な岳人です。

<雲上スキー滑降>

約30m氷化した夏道を慎重に下って、3700m地点でやや緩やかな雪面を探し、ステップを切り

ザックを置く。アイゼンを外し、スキー板に履き替える。急だからもう少し下から滑ることを上田さんに薦めるが、神懸りの自信復活。転んでも少し滑落するだけで止まるであろうと OCUAC 的楽観判断で滑降にはいる。上部もやや雪面が緩み、恐怖を感じないスキーができた。

9 合目で後続隊と合流、昨日同様片岡 L 先導で、全員後に続くがゲレンデと違って思うようにターンできない。経験豊富な片岡さんはショートスキーで 4～5m 幅でスイスイ滑って行く。傾斜は 7 合目からは 20 度ぐらいで、雪面は広く長く雄大であり、全員滑降を楽しむことができた。伴さんは今日ツボ足アイゼンで富士山往復。

<神隠し>

2 時頃になると雲が湧き出し、ガスで仲間が見えない。声で場所を確認し、離散を繰り返し、滑走ルートを確認しながら高度を下げる。時々、突然ガスが消え、視界が大きく広がる。独立峰の特色で、多彩な自然変化が楽しめる。アイゼンで行動した伴さんが、少々遅れ、違う下山コースを取ったが、直ぐに修正し合流した。富士山の霊力の影響か、無線交信が一日中できなかった。

<お神酒>

頂上でお供えしたお酒を、下降時にチビリチビリ。「おみき」が「おみず」に聞こえ、水と間違え、下戸な人がゴクリと飲んでしまった。肉体疲労と言語疲労がパーティ全体に漂うが、汗をかいた後の爽やかさは心地よい。

<雪のご加護>

例年であればこの時期、7 合 5 勺で雪が消え、6 合 5 勺まで滑れる年はない。今年は暖冬で、日本全国雪不足ではなかったか？何故富士山だけに雪が降る。神を畏怖する純粋人の初めてのスキー山行なので、雪を集めてくれたに違いない。片岡は今シーズンの名残惜しさに、末端の小さな雪田も感謝の気持ちで滑る。来年も富士山のご加護と霊力を授かり楽しいスキーができますように。

行動記録

5/19 : BC 出発 10 : 00—新 5 合目 (2400m) 10 : 40—元祖 7 合目 (3030m) 13 : 30—
8 合目小屋直下 (3150m) 着 14 : 10 全員終結後滑降開始 15 : 00—スキー板外す (6 合 5 勺)
15 : 40—新 5 合目着 16 : 20—BC 着 17 : 00
5/20 : 起床 4 : 15 快晴
BC 出発 6:20—新 5 合目出発 7 : 00—新 7 合目 (2780m) 8 : 55—8 合目 (3250m) 9 : 40—
9 合 5 勺 (3550m) 11 : 10—頂上着 12 : 10—頂上直下 (3770m) 滑降開始 13 : 10—全員終結
滑降開始 (9 合目) 13 : 50—スキー板外す (6 合 5 勺) 15 : 30—新 5 合目着 16 : 00

(片岡、上田記)

ニュージーランドの Great Walk を歩く

メンバー：上田 忠士、美枝子、F さん（友人女性）

期間：2006 年 12 月 21 日～2007 年 1 月 9 日

私と家内、友人の 3 人で初夏のニュージーランドの南島に出かけた。トレッキング（この国ではトランピングという）主目的であり、Great Walk 2ヶ所を歩きマウントクックの麓に 3 日間滞在した。移動はレンタカーを利用、宿は YHA(ユースホステル)と B&B（注）であった。

12/21：関空出発、シンガポール航空でシンガポール乗換え、南島のクライストチャーチへ。

関空で NZ ドルを買う。1 ドル 90.9 円と高い。

12/22：クライストチャーチ着 12：40。シャトルバスで予約していた YHA へ行く。街の中心に

あり便利であり、設備もよい。市内をぶらぶら歩き観光。夕食はイタリア料理レストランでシーフード。3 人でワイン 1 本を飲み、216 ドル。

12/23：早朝 7：30 の便でクイーンズタウンに飛ぶ。

ここは美しい湖に面し、雪を被った岩山が見える風光絶佳のところだ。午後クイーンズタウンヒルの頂上まで 3 時間の散策。

湖畔の YHA に泊る。

12/24：クイーンズタウン滞在。朝方小雨であったが、晴れてきた。Bobs peak の丘にゴンドラに乗らないで、YHA 近くから登る。ベンローモンドトラックをサドル手前まで歩く。眼下は Wakatipu 湖、遠くに雪を被った Double Corn, Cecil Peak 峰などが見える。女王が住むにふさわしい美しい光景である。下山、15：40。6 時間 10 分の walking であった。



今日はクリスマスイブ、Board Walk のシー
フードレストランで夕食。ワイン 1 本飲み、
273ドル。

DOC でルートバーントラックの小屋予約券
を受け取る。

* DOC : Department of Conservation

自然保護省

12/25: 予約していたバスに YHA 前でピックアップ
してもらい、トラックスタート地点のルート
バーンシェルターへ。美しい吊り橋を渡ると
いよいよルートバーントラックの始まりであ
る。荷物重量は女性9~10kg,私は15kg程度。
ルートは完全に整備されており、緑濃いブナ
樹林の中を他パーティと抜きつ抜かれつ歩く。
登りらしいものは無く、水量豊かで清冽なバ
ーン (川) に沿って歩くと3時間弱で今日の
宿泊小屋、フラッツ小屋に到着。

※ ルートバーントラック Walking はガイ
ド付きと independent(個人歩き)があり、ガ
イド付きはシャワーがあり、食事も寝具も用
意されるが、個人歩きは持参しなければならない。
いずれも山小屋(Hut)は予約制である。

12/26: 小雨の中、雨具を着用して 10:10 出発。緩
やかな登り約 300m、1 時間半でフォールズ
小屋に到着。一番乗りだ。この頃は雨も上が
り、滝付近を散策。豊かな水量になっており
迫力ある滝である。遠くの岩山には幾条もの
滝が流れ出ており、雨の時しか見られない壮
大な光景を見る。フォールズ小屋の管理人部
屋に招待されて、コーヒーをご馳走になり 1
時間ばかり談笑する。クリスマス休暇で奥さ
んがダニーデンから来られていた。

12/27: 夜中は強い雨であったが、出かける頃は晴
れ間も望まれた。出発 8:00。すぐ森林限界を
越え、ルートバーンの流れに沿って岩交じり
の草地を歩く。1 時間半ぐらいで美しいハリス
湖が眼下に見えるところに来ると、コニカ

ルヒルが大きく見える。トラックの最高点
(1277m) ハリスサドルは近い。背後の岩山
コニカルヒルは登山道が閉鎖されていた。今
夜の宿泊小屋マッキンジーへは右眼下にホリ
フォード谷を、遠方に氷河に覆われた山並み
を見ながら下る。この頃から小雨が落ちてき
た。まもなく群青色の神秘的なマッキンジー
湖が望まれる。森林帯に入ると苔むした岩石、
老木の道だ。まるで庭園のようである。湖畔
のマッキンジー小屋到着 14:20。静かな湖
畔に立ち、屹立するエミリーピークを望むと
日本から遠くやって来た甲斐を感じる。

12/28: 一時晴れ間も見えたが視界 300m~1000m
の中の行動となる。出発 7:30。途中の
アーランド滝は大変な水量でシャワーを浴び
ながら滝下の道を通り、キーサミットに登り、
周回コースを一周したが全く景色を楽しむこ
とはできなかった。ホーデン小屋経由デバイ
ド着 14:10。ここでルートバーントラック
33kmが終わった。予約していたシャトル
バスでテアナウへ。

B&B に落ち着きシャワーを浴びる。イタ
リア料理レストランに出かけ、ルートバーン
トラックス踏破を祝ってワインで乾杯。

12/29: 明日からのトレッキングに備えて食糧など
購入、テアナウ市街を見物。DOC に寄り小
屋の予約券を受領。夜宝塚の藤本さんから電
話があり、今朝大阪は降雪があったとのこと
だ。

12/30: 今日から二つ目の Great walk ケブラート
ラックに入る。8:30 予約していたシャトル
バスが 8:30 B&B まで迎えに来る。トレッ
キングスタートのコントロールゲート
まで15分だ。コントロールゲート出発 8:
50。湖沿いの森の散歩道を歩く。高度差はな
く気持ちのよい歩きが続き1時間半でブラッ
ドベイベイへ到着。ここから 850mの登りが始ま
るが緩やかであり、鬱蒼とした森の小道であ



チ
を

済ませたところから小雨が降ってきた。森林限界を過ぎると視界が開けたが、視界 1000m ぐらいだ。ガスの中時々左右に湖が見え隠れする。ラクスモー小屋着 14:00。テアナウ湖を見下ろすすばらしいところだ。ここは標高 1085m。気温 6.3 度。ラクスモー山頂に新雪があった。

12/31: 高曇りであるが、視界のきく朝だ。7:45 出発。緩やかな登りが続くが、景色を見ながらゆっくり歩く。稜線に出てしばらく進むとラクスモーへの分岐だ。ここにザックをデポして新雪を踏んでラクスモーに向かう。約 20 分で 1472m の山頂に立つ。9:30 到着。すばらしい景色であるが、寒く早々に下る。フォレストバーンシェルターをこのトラックのハイライトである細い稜線歩きだ。アップダウンを繰り返すが問題なく通過、ハンギングバレーシェルターへ到着 12:15。ここでランチ、人なつこい野鳥ケアが 1~2m の近

くまでやってくる。ここからアイリスバーン小屋まで約 1000m の下りが続く。到着 15:15.7 時間半の行動であった。

1/1: 2007 年が明けた。すばらしい天気だ。今日は新年、正月であるが全くその雰囲気がない。このトレッキング中の食べ物は軽量化を図ってすべて乾燥食品。唯一の楽しみは 1 日 1 合程度のワインだ。快適であった小屋を出発 8:00。緩やかな森の中の道を小鳥の囀りを聞きながら下る。小鳥は 1~2m 近くまでやってくる。やがて湖畔のモトウラウ小屋に到着 13:40。

1 人湖畔で 30 分ばかりぼんやり行む。至福の時だ。

1/2: 今日もいい天気だ。出発 8:00。殆ど高低差のない小道をワイアウ川に沿って歩く。釣り人をよく見かけたがここはフィッシングの本場らしい。3 日前に出発したコントロールゲートに到着。12:50。ケブラートラック一周したことになる。7.6 km だ。バスを予約し

ていたが、時間もあるので、テアナウまで湖畔の道を歩く。テアナウからバスでクイーンズタウンのYHAに落ち着く。

1/3 : 今日は Mt.Cook ビレッジへ移動の日だ。レンタカーを借り、地図を片手にワナカへ。

明るく賑やかなワナカ湖畔でランチ。快適に国道8号を北上し Mt.Cook のYHA 到着 17:30.6時間、285kmのドライブであった。

1/4 : 今日はすばらしい天気だ。高く聳える秀峰 Mt.Cook が美しい。フッカーバレー、レッドターンストラックの日帰り Walking を楽しむ。

1/5 : セアリーターンストラック、ケアポイントへ Walking. セアリーターンズから私1人雪渓を越え、ミューラー小屋への道を進んだが、時間がなく引き返す。下山後、車でブルー湖、タズマン氷河見物へ出かけた。

1/6 : Mt.Cook ビレッジに別れを告げクライストチャーチへ移動。3人交代して運転、日本と同じ左側通行、車は少なく快適なドライブである。走行340km、クライストチャーチのYHAにチェックイン、17:00.

1/7 : 港町アカロアへドライブ、片道1時間半、牧歌的なルートである。博物館、湾内クルーズを楽しむ。ペンギン、イルカの遊泳を船上から見て感動。

1/8 : 空港近くのレンタカー会社に車を返却。午後のシンガポール航空で出国、シンガポール経由関空へ。

1/9 : 関空着 8:20.

昭和40年卒 : 上田 忠士

(注)

YHA (ユースホステル)

青少年が自由に旅行することを趣旨として、世界中でユースホステル協会が運営しているホステル。最近ではユースというよりもシニアホステル

とでも言いたくなるように中高年の利用が目立つ。

食事は出ない。トイレ、シャワーは共同でキッチンには冷蔵庫、湯沸かし器、鍋・釜もそろっている。

B&B (ベッド&ブレイクファストの略)

朝食付きで客室を提供している宿のこと。一般家庭の空き室を利用しているところ、客室数や設備を備えたホテル形式で経営しているところもある。雰囲気はそれぞれ。

都市の郊外や地方にある B&B のなかには、歴史的な建物をアンティークで飾ったり、ガーデニングにこだわっていたりと、優雅な雰囲気のところも多い。

(藤本 勇 注記)

総会が開催されました！

2007年4月21日

弥生会館にて

今年も33余名の出席の下、総会が開催されました。川勝会長の丁寧な挨拶に続き、佐藤幹事長の挨拶があり、山田幹事の昨年度活動報告及び今年度活動予定があり、上田幹事より山岳会及び雪線の会計報告等々がなされました。

伴明氏の挨拶では、昨年度提案された8000M峰への挑戦について、一步踏み込んだ案が出され、講演にて近藤和美（かづよし）さんから、「最近の8000m峰登山」のタイトルの下、様々な興味深い話がなされ、チョッピリ8000mへの夢が具体化する兆しが、出て参りました。

なお、会計が上田 忠士さん になり会費の徴収も、皆様のご協力を得て、順調に推移していております。今後ともよろしく申し上げます。

新規山岳会口座 ￥5000：郵便局 大阪市立大学山岳会 記号：14020 番号：38156801
--

幹事長ご挨拶

2007年4月21日

佐藤 一良

会員の皆様今日は。

本日は約30名の会員と現役部員の方々がお集まり下さいました。ありがとうございます。

幹事の方から昨年度の活動報告と今年の予定を話していただきますが、私から全体的な状況を説明させていただきます。

登山という素晴らしい行為に魅せられ、大阪市大山岳部に集い、卒業して山岳会会員として年齢を重ねてきた仲間の方々は今も大自然の中で人生を楽しんでおられます。海外ではネパールヒマラヤ、ヨーロッパアルプス、ニュージーランドなどに遊び、国内では北アルプス、中央アルプス、大台・大峰の沢登り、東北の山々、南九州の山々、又樺池をホームグレンデとする4回にわたるスキー合宿など地球を舞台にして熟年パワーを発揮しています。

特に仕事をリタイヤされた60歳台の方々の元気さが際立っています。その為の体調の管理も徹底しておられ、いまだに禁煙の出来ない私は肩身の狭い思いで仲間に入れてもらっています。後ほど詳しいお話を聞けるとおもいます。

一昨年の宮崎君に続き、9月には山岳部部長の小林君、今年2月には私と同期でカンジロバの隊員であった諏訪ドクターが病気のため亡くなりました。7月には広谷東京支部長が脳血管障害、2月には私が腹膜炎、3月に伴さんが硬膜下出血と大病を患う会員が続きました。つくづく健康の大切さを考えさせられた一年でした。

総会案内の返信欄より（近況報告等）

○大島民夫（昭和19年卒）

最近10年間に肺がん（左）、肺がん（右転移なし）、心不全、心不全肺炎併発とかかりました。もう山も階段も登れなくなりました。まだ寿命があるのは若い時から中年にかけての山行のおかげだと思います。現在、今月で米寿になりました。

○谷口清士（昭和27年卒）

最近、白内障が進んで来ましたが、すぐには手術できない事情があって困っています。出席諸兄のご健勝を祈っています。

○山本勝（昭和30年卒）

元気です。それなりに忙しくしています。

○高木健次（昭和30年卒）

昨年4月に愛宕山の急坂下山で右膝の副靱帯を痛めて、年間僅か6回の登山に終わりました。山登りも少しは近くでやりますが（予定）、「愛宕山が今昔物語りにどんなに描かれているか」を論文にまとめるべく努力中です。

○林日出雄（昭和32年卒）

右手、歩行が困難です。

○堺皓二（昭和33年卒）

初めて出席しようと準備していたところ藤井寺の99才の母危篤の報が本日（4/7）に入り、又、欠席します。久しぶりと思っていたのに残念です。1963年初冬、京大演習林由良川源流に行き感激しました。今はどうなっているのかなど、関西のお話をたのしみにしていましたが。

○北濃祥二（昭和33年卒）

今年は前立腺生検のための入院から退院したばかりですので、欠席させていただきます。皆様によろしく。

○中西雅一（昭和34年卒）

一度はヒマラヤをみたく昨11月にナガルコット→チャングナラヤン→ポカラ→カレー→ダンプス→ノーダラ→サランコットの展望地をトレッキングしてきました。やはりヒマラヤはすばらしかった。山は永遠の恋人です。

○小林深（昭和35年卒）

秋に雪線にて山岳写真展を開かせて頂きたいと思っております。

○小林てる（昭和36年卒）

ご無沙汰しております。「四十年、会わざりし友と葬儀にてまみえて互いに姓名を問う」。大橋会長の葬儀の受付で思わず「伴明さん？」と聞いてしまいました。「服部てるさんですか？」と聞き返されて納得しました。町でお会いしてもわからないでしょうね。お元気そうでなりよりでした。

○長谷川ふみこ（昭和36年卒）

ヒュッテ雪線は賑わっております。ただ気になるのは120名程の会員の中で雪線を訪問してくれたのは30人程に過ぎないという事です。せめて半数の60名の方々が山小屋生活を楽しんでいただけるよう皆さんのお知恵をお借りしたい。良い案がありましたら雪線を担当していただいている久保田さん、中嶋さん、兵頭さんに連絡をお願いします。また来年が設立10周年ですので記念イベントを開催したいと考えています。そのための準備委員会を6月に発足させたいと思います。

現役は法学部の関君が卒業して山岳会員となり、現在7名です。新入部員勧誘に頑張ってくれていますが入部者はまだいないようです。吉報が待たれます。山田さん、佐々木さん、伴さんが中心になって育ててくれています。

さて今年の予定ですが企画運営幹事の方から説明があると思いますのでそちらに譲ります。とにかく皆さんくれぐれも健康に留意され、70歳-80歳まで大自然の中で一緒に遊びましょう。ありがとうございました。

総会案内の返信欄より（近況報告等）

○大島民夫（昭和19年卒）

最近10年間に肺がん（左）、肺がん（右転移なし）、心不全、心不全肺炎併発とかかりました。もう山も階段も登れなくなりました。まだ寿命があるのは若い時から中年にかけての山行のおかげだと思います。現在、今月で米寿になりました。

○谷口清士（昭和27年卒）

最近、白内障が進んで来ましたが、すぐには手術できない事情があつて困っています。出席諸兄のご健勝を祈っています。

○山本勝（昭和30年卒）

元気です。それなりに忙しくしています。

○高木健次（昭和30年卒）

昨年4月に愛宕山の急坂下山で右膝の副靭帯を痛めて、年間僅か6回の登山に終わりました。山登りも少しは近くでやりますが（予定）、「愛宕山が今昔物語りにどんなに描かれているか」を論文にまとめるべく努力中です。

○林日出雄（昭和32年卒）

右手、歩行が困難です。

○堺皓二（昭和33年卒）

初めて出席しようと準備していたところ藤井寺の99才の母危篤の報が本日（4/7）に入り、又、欠席します。久しぶりにと思っていたのに残念です。1963年初冬、京大演習林由良川源流に行き感激しました。今はどうなっているのかなど、関西のお話をたのしみにしていましたが。

○北濃祥二（昭和33年卒）

今年は前立腺生検のための入院から退院したばかりですので欠席させていただきます。皆様によろしく。

○中西雅一（昭和34年卒）

一度はヒマラヤをみたく昨11月にナガルコット→チャングナラヤン→ポカラ→カレー→ダンプス→ノーダラ→サランコットの展望地をトレッキングしてきました。やはりヒマラヤはすばらしかった。山は永遠の恋人です。

○小林深（昭和35年卒）

秋に雪線にて山岳写真展を開かせて頂きたいと思っております。

○小林てる（昭和36年卒）

ご無沙汰しております。「四十年、会わざりし友と葬儀にてまみえて互いに姓名を問う」。

大橋会長の葬儀の受付で思わず「伴明さん？」と聞いてしまいました。「服部てるさんですか？」と聞き返されて納得しました。町でお会いしてもわからないでしょうね。お元気そうでなりよりでした。

○長谷川ふみこ（昭和36年卒）

いつも欠席で申し訳ありません。たぶん近く関西に帰る予定です。総会とボート祭に出るのを楽しみにしています。藤本勇夫妻の案内でニュージーランド北島をドライブして来ました。とても楽しかったです。

○小笹孝（昭和36年卒）

「高齢者向きの滑り方」にハマッています。とにかくラクに曲がります。

○鷲田英毅（昭和39年卒）

皆様のご活躍につき会報その他にてお聞きして居ります。小生、療養中の所、いまだ体力回復に至らず、残念ながら欠席致します。

○岡野幸義（昭和39年卒）

出席するつもりでいましたが、いつものとおり仕事が入って来ましたので残念ながら生憎欠席させていただきます。山岳会のHPいつも読ませていただいております。伴さんはじめ皆様、活発に活動されているのは羨ましい限りです。早く山の現役に戻りたいものです。伴さんの六甲全山16時間、ダイヤモンドトレイル行き。自分自信ではどのくらいかかるか一度試してみたいと思っております。皆様方によりしくお伝えください。

○丸子隆志（昭和41年卒）

盛会を祈念します。スキーだけは少し上達しました。少しづつ山歩きをと思っております。

○大森昌也（昭和41年卒）

最近、隣町の友人、日本勤労者山岳連盟の人が氷ノ山で死す。まだ54才！。勤めながらの山登りはどうしても無理が重なるよう。もうちょっとで定年だというのに。皆さんお元気に！！

○澤田宗博（昭和47年卒）

当日は寺院の行事がすでに計画されており、残念ですが欠席です。2月大山スキー登山のメンバーの皆さんお疲れさまでした。

○和田城志（昭和50年卒）

退職しました。無職です。4月から月のうち2週間を高知住いです。

○武部秀夫（昭和53年卒）

2006年は岡山の労山の隊でチベット・アリカラコルム山脈（アクサイチン地区）の未踏峰ゴザルカンリ6200mにチャレンジ、失敗5800m迄でいい年ではありませんでした。大きなヒマラヤ行きたいですネ。日常は岡大山岳会の人達や労山の人と沢、岩、雪、山スキーとあそんでいます。今冬は3回、1、2月に大山北壁がよいと山スキーです。職場の定休日の火曜日は近所で岩トレにあそんでいます。

○稲垣喜久雄（賛助会員）

義母の49日法要（喪明け）と重なり欠席です。山の話が聞けず残念です。電子メールで皆様のご活躍を楽しく拝読しています。

いつも欠席で申し訳ありません。たぶん近く関西に帰る予定です。総会とボート祭に出るのを楽しみにしています。藤本勇夫妻の案内でニュージーランド北島をドライブして来ました。とても楽しかったです。

○小笹孝（昭和36年卒）

「高齢者向きの滑り方」にハマッテいます。とにかくラクに曲がります。

○鷺田英毅（昭和39年卒）

皆様のご活躍につき会報その他にてお聞きして居ります。小生、療養中の所、いまだ体力回復に至らず、残念ながら欠席致します。

○岡野幸義（昭和39年卒）

出席するつもりでいましたが、いつものとおり仕事が入って来ましたので残念ながら生憎欠席させていただきます。山岳会のHPいつも読ませていただいております。伴さんはじめ皆様、活発に活動されているのは羨ましい限りです。早く山の現役に戻りたいものです。伴さんの六甲全山16時間、ダイヤモンドトレイル行き。自分自信ではどのくらいかかるか一度試してみたいと思っております。皆様方によろしくお伝えください。

○丸子隆志（昭和41年卒）

盛会を祈念します。スキーだけは少し上達しました。少しづつ山歩きをと思っております。

○大森昌也（昭和41年卒）

最近、隣町の友人、日本勤労者山岳連盟の人が氷ノ山で死す。まだ54才！。勤めながらの山登りはどうしても無理が重なるよう。もうちょっとで定年だというのに。皆さんお元気に！！

○澤田宗博（昭和47年卒）

当日は寺院の行事がすでに計画されており、残念ですが欠席です。2月大山スキー登山のメンバーの皆さんお疲れさまでした。

○和田城志（昭和50年卒）

退職しました。無職です。4月から月のうち2週間を高知住いです。

○武部秀夫（昭和53年卒）

2006年は岡山の労山の隊でチベット・アリカラコルム山脈（アクサイチン地区）の未踏峰ゴザルカンリ6200mにチャレンジ、失敗5800m迄でいい年ではありませんでした。大きなヒマラヤ行きたいですネ。日常は岡大山岳会の人達や労山の人と沢、岩、雪、山スキーとあそんでいます。今冬は3回、1、2月に大山北壁がよいと山スキーです。職場の定休日の火曜日は近所で岩トレにあそんでいます。

○稲垣喜久雄（賛助会員）

義母の49日法要（喪明け）と重なり欠席です。山の話が聞けず残念です。電子メールで皆様のご活躍を楽しく拝読しています。

以 上

伴 明

1. 主旨：

大阪市大山岳会としては過去ウルキンマン（6150m）、モリモトピーク（6750m）、カンジロバヒマール（6882m）、ランタンリルン（7246m）、四光峰（7309m）と五つの未踏峰を登ってきました。が、1989年に登頂した四光峰以来すでに18年が過ぎようとしています。今ここで一つぐらい8000m峰を登っておきたいとの思いで計画を立てました。

2. 登攀対象：

A 案） ネパールヒマラヤ、ダウラギリⅠ峰（8167m）、北東稜

B 案） カラコルム、ガッシャーブルムⅡ峰（8035m）、西南稜

3. 時期：

A 案の場合・・・2008年秋（8月末～10月末）

B 案の場合・・・2008年夏（6月末～8月末）

4. 日程：

A 案の場合・・・8月末 日本出発

9月初旬 カトマンズ→ポカラ→ジョムソン→タパレス
→ フレンチパス→ ダウラギリⅠ峰 B.C.

9月中旬～10月中旬 高度順化及び登攀活動、登頂

10月下旬 B.C.撤収→往路をとってカトマンズ

10月末 日本帰国

B 案の場合・・・6月末 日本出発

7月初旬 イスラマバッド→スカルド→アスコレー→

コンコルディア→ガッシャーブルムⅡ峰 B.C.

7月中旬～8月中旬 高度順化及び登攀活動、登頂

8月下旬 B.C.撤収→ゴンドゴロ→イスラマバッド

8月末 日本帰国

5. メンバー：

大阪市大山岳会会員及び山岳部員・・・8名

6. 費用：

約800～960万円（参加者負担金100～120万円/人）

7. 準備：

1) 07年9月22日～10月14日

ネパール、クーンブ地域、アイランドピーク（6189m）登頂
及び周辺での順化体験。

2) 07年10月末

A 案またはB 案どちらかの決定と、メンバーの決定。登山許可申請。

3) 08年1月～6月

主に富士山他日本の山でのトレーニング。

以上。

平成18年度 活動報告

時 期	活 動 内 容	参 加 者
4月28～5/1日	西穂高岳(西尾根)	伴、兵頭、山田、現役5名
5月28日	ボート祭	山辻、佐々木、上田、佐藤他、現役数名
6月11日	大峰 もじき谷遡行 「ぶよ」に悩まされる。	上堂、伴、佐藤、島川、吉村、山田、現役4名
7月8～9日	大山 (現役新人募集登山) 一名参加はあったのだが、これっきり 現役木野君、頂上へ先回り	上堂、伴、島川、山田、現役6名
8月5～11日	劔岳合宿 定着初日の懸垂時と、雪渓下降時のAccident 翌夕、台風急接近情報入り、途中打ち切り この後、現役藤井君は穂高まで縦走	佐々木、島川、山田、現役5名
9月23～24日	大峰 孔雀俣谷遡行——奥駆道を前鬼まで	伴、山田、現役2名
10月14日	鈴鹿 元越谷遡行	伴、山田、現役3名
11月3～4日	空木岳～南駒岳～越百山	伴、上田、島川、山田、現役3名
12月16日	忍海駅～葛城山～金剛山～天見駅まで	上堂、伴、山田、現役4名
2月10～12日	大山登山とスキー 北壁 弥山尾根、七合五勾尾根	上堂、伴、上田、佐藤、島川、大島、井本、吉村 澤田、山田、現役2名
3月10日	天見駅～槇尾山～和泉葛城山～犬神温泉	山辻、伴、佐々木、島川、山田、現役3名
3月21日	大山 八合尾根	武部、山田、藤井、岡大OB山崎
海外の山行	4月： 佐々木 アンナプルナ内院—テンビーク登頂	
	5月： 上田 シャモニからツエルマットへ	オートルート スキー
	6月： 小林 ペルーアンデス アルパマイヨ	乗馬にての撮影行
	7月： 佐々木/上田 モンブラン登頂	
	9月： 島川 キナバル登頂	お嬢さんとの親子登山
	9/10月： 佐々木 東ネパール(ダウラギリ周辺)トレッキング ドウモリ登頂	
その他	小笹スキースクール:12月～3月 夕張/樽池にて4回開講 各講十数名参加	
	伴 : 諸トレーニング登山 比良山、空木岳、六甲全山他	

編集後記

「仕事でラフティングをしなければならない」と言うとうらやましいと言われそうです。しかし、修学旅行という、24時間勤務、残業手当なしの生徒を引率する仕事の中のひとコマなので、損得でいうといかがなものかと思います。

ラフティングというのは、ようするにゴムボートで激流を下るというもので、私は、3回ほど、北海道の空知川で体験しましたが、インストラクターにネパール人がいたのでびっくり。聞いてみればネパールでも盛んで、スン・コシ、ボテ・コシ、カリ・ガンダキと聞いたことがある川も有名なゲレンデだとか。

この川下りは、五條、保津川、北山川、大歩危・小歩危でもやっているそうです。

危険大好きの会員の皆様、ラフティングをやってみられては？

(Y)

山岳会HP <http://www.happy.net/OCUAC/index.htm>

現役HP <http://www.ocuac.com/pctop.html>